諸生命一体感の涵養

くらしのリサーチセンターは今年20周年を迎えることになりました。ひとえに皆様方をはじめ関係各位のお力添えの賜と深く感謝申し上げます。

ところで、昨今の世の中の広域に及ぶ身勝手な行為の氾濫をみますと、事態はモグラ叩きでしのげるものではなく、何か社会の精神構造に深い欠陥があるように思えてなりません。

たとえば、現代日本社会では、高い理想というものが語られることは殆んどなくなっています。ＥＵ（欧州連合）は少し違っています。

ＥＵは国歌にあたる　The　european anthem を制定（1986年）していますが、それはベートーヴェンの第九の合唱の部分です。この歌のシラーによる詩は、人々は神の摂理の下で皆同胞になると謳いあげています。

人類皆兄弟というのは、近代以降は、むしろ一種の虚構あるいは実際とはかけ離れた抽象的理念にすぎないとみなされてきていたうらみがあります。しかし、現在、人類皆兄弟というのは、理念や社会的な位置づけにとどまらない、生物学的な事実でもあることがわかりました。すべての現生人類がアフリカの一人の女性に発していることが20世紀の終わりに至って、科学的に解明し尽くされたのです。

人間社会は、太古の昔から人類一体の思想を抱いており、宗教がその考えを深めておりました。人間の英知とはすごいものです。人類だけでなくすべての生きとし生けるものは、一体であるという思想も太古から抱懐され続けてきました。このことについても現代科学は、地球上の全生命が原始の一つの生命から誕生したものであることを明らかにするに至っています。

この人智のはるかに及ばない壮大な仕組みは、さしあたり生態系と呼ばれています。ただ大いなる大自然は、実証科学の概念でとらえきれるものではないことも留意すべきでしょう。大自然は生態系という概念には収まりきれない何らかの精神的存在でもあるということが指摘されるようになっているとさえ思われます。こうした先史以来の昔の感覚が無視しがたいものとして再評価されつつあるのです。

いずれにしろ私たちは、オンリーワンや砂山の砂であるはずはなく、生態系の一員であり、また社会の一員であることによって存続しているというのが、本当の姿なのです。高い道徳性はこの立脚点から生れるものでしょう。

当センターは、つねに人倫の基本に立つべく心がけてきました。当センターは、行政、企業、生活者の相互理解を深めることによって社会の発展に寄与することを目的として平成元年7月に設立されました。以来161回に及ぶ、くらしと産業に関するシンポジューム、講演会をはじめ、海外調査を含む調査研究、出版事業等を展開してまいりました。この間における関係諸官庁のご指導、ご協力、併せて会員各位のご尽力に、あらためて感謝と敬意を表する次第であります。

20周年を迎える今年は、「生活者：消費者の信頼獲得をめざす企業活動の推進」をメインテーマとして掲げたいと考えております。引き続き変わらぬ御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

（2008.1.29　社団法人　くらしのリサーチセンター総会あいさつ）